

蹴球の盗賊王

はちみー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

目が覚めたら超次元サッカーの世界。
鏡見たら闇バクラ。

あつ、はい。天ぷら天ぷら。

とりあえず盗賊王の名に恥じない生き方をしよう。

…サッカーでな！フハハハハハハハ！

転生憑依物です。

闇バクラが使ったカードが主な必殺技になりますが、皆様からの「これ現代のバクラ使いそう」みたいながありましたら採用するかもしれません。

デュエル（サッカー）スタンバイ！

目次

蹴球の盗賊王「本編」

第1話	1
第2話	4
第3話	7
第4話	14
第5話	18
第6話	22
第7話	26
第8話	29
第9話 前編	32
第9話 後編	37
第10話	40
蹴球の盗賊王外伝	
～豪炎寺兄妹～	43
アテム、マリク、そして俺様。3人交われば…	47
クリスマス	51

蹴球の盗賊王―本編―

第1話

「ぐああああ!!」

「く…コイツ…!」

「あ、悪魔だ…」

「ははははは!その程度で俺様に勝とうなんざ数千年早いぜ!」

稲妻町の駅前路地裏。

そこには地に伏す不良3人と、その様をみて笑う少年がいた。

「それじゃあコレは貰ってくぜ」

「お、俺達の財布…!」

「返せ…!」

「おいおい、コイツは賭けられたもんだぜ?自業自得ってもんだ。じゃあな負け犬共」

少年はその場から立ち去り、残ったのは呻き声だけだった。

「チツ!これだけか、シケてやがるぜ…」

全く、俺様の労力を返してもらいてえもんだぜ。

…この地に生まれてから十数年、この俺「猿良了」は異世界からの転生者だ。

それも、憑依として。

俺様には親はいない、物心ついた時にはある施設に預けられていた。

だが彼処は俺様には合わねえ、まるで陽だまりにいるような場所はない。

そんで飛び出してから、あの手この手で生きてきた訳だ。

今は小学六年ってところだが…まあ当然通ってねえ、親がいねえかな。

だからこうしてカツアゲして食い扶持を稼いでるんだが…

「おい、そこのお前！隠れてねえで出てこいよ！」

「ほう…よくわかったな少年」

「生憎と人の気配には敏感でね、何者だ」

「私は帝国学園の総帥…影山零治だ」

「へえ、あの帝国か。それで総帥様がこんなガキに何の用だ？」

「猥良了、親は既におらず——園に預けられたが逃亡。その後行方不明だった」

「よく調べてるじゃねえか、それで？」

「私の帝国学園に來ないかね、君の才能を存分に発揮出来るぞ？」

この男、確かに俺様サイドではあるが…

コイツは俺を手駒としか考えてねえ、嫌いじゃねえがな。

「ハハハ！折角の申し出だが…丁重にお断りする」

「何故だ」

「アンタは手駒として俺様を使おうって魂胆だろうが…テメエに使い捨てられる程安くはねえんだよ影山零治」

「…」

「だが、取引といこうじゃねえか」

「取引だと？」

「そうとも、お前が俺様を本当に必要となった時に1度だけ協力してやるよ」

影山は少し考えた後に、ニヤリと笑った。

「ほう、それで私は何を差し出せばいいのかね」

「要求は…自由に使えるキャッシュカード、それから望んだ時にてめえの手駒と試合出来る権利だ。後者は融通は聞かせてやるよ、んで試合内容で俺様が切り札になりえるかもわかるだろうぜ」

「…ふん、ではそれで取引してやろう。だがお前が切り札になれないと判断した場合はどうする？」

「そうはならねえよ、お前は俺様の力を欲する…」

「く、クハハハハ…いいだろう。後日お前の元に手下を向かわせ帝国まで来てもらうぞ、そこでお前が必要なものを渡してやろう」

「出来るだけ早くしてくれよ？俺様はそう長くは待たねえぞ」

「3日後には…いや、3日後は祝日だったか。1週間後だ」

「…アンタ意外と祝日とか気にするタイプなんだな」

「貴様が自由に使えるキャッツシユカードなんて求めなければもつと早い」

と、そんな事があって解散した。

さてさて、先ずは影山について調べるとするか。

「ホワイトシーフ召喚！」

白いタキシードとシルクハットを被った壮年の怪盗が姿を現した、俺様が使ったカードが俺様の力となる。

最も、俺様が使つてなくとも他のカードが使えるだろうが…そんな気分には今はなれないな。

「ホワイトシーフ、影山零治について調べあげてデータを盗み出せ。抜かるなよ」

命令を聞いたホワイトシーフが姿を消す。

この先も世話になりそうだな。

「さて、飯食つてホテルに帰りますかねえ」

心の中でスイツチを切り替える。

いわゆる表バクラ（になりきった闇バクラ）だ。

こうしてれば基本的に好青年という訳だ。

「お腹すいたなあ…何食べようかなあ〜？」

将来起きるであろう楽しみを想像しながら、商店街に入っつたのだった。

第2話

「え？サッカーを？」

「うん！サッカーやろうぜ！」

俺様がベンチで本を読んでいると、やたら眩しい奴に絡まれた。如何にもサッカー大好き人間だ、目を見たらわかる。

そして、1番厄介なタイプでもある訳だ。

「まずは自己紹介が先じゃないかな？僕は獺良了っていうんだ」

「あ、そうだな！俺は円堂守！」

「ふうん、円堂君だね？それでサッカー…だっけ」

「おう！やろうぜサッカー！」

…これは断つたらめんどくせえパターンだな、仕方ねえな。

「うん、いいよ。何するの？」

「とりあえず俺GKだからさ、シュートしてくれよ！俺、獺良のキック受けてみたいんだ！」

「…わかった、じゃあ思いっきり行くよ？」

「おう！どんとこい！」

円堂がゴール前で構えた、その表情をみるにワクワクして仕方ないって顔だ。

……その顔が歪む姿を見たいもんだなア。

「じゃあ…精々ケガしねえように気をつけなア！」

「様子が変わった…!？」

「フアントム…シュートオ！」

「ぐ…うおおおおお!!うわあ！」

放った必殺技は円堂を貫いてゴールに突き刺さった。

まあこんなもんかねエ…

「…ふう、どうだったかな？」

「すげえ…」

「ん？」

「すつげえよ獺良!!俺、こんなシュート受けたの初めてだ！まだ腕が

痺れてる…！」

…なんだコイツは、普通なら悔しく感じるどころじゃねえのか？

「悔しくないの？ゴール破られたのに」

「そりゃあ悔しいさ、悔しいけど。それよりもワクワクしてきたんだ！こんなシュートを打つヤツがまだ世界には沢山いるんだもん！」

「はは、前向きだね」

「それよりさ、シュート打つ時雰囲気変わったけどアレは…？」

「ああ、それは言うなればもう1人の僕。今の僕は外向き用の僕って感じかな」

「外向き用…??」

円堂が首を捻ってる、もしかして伝わらなかったか？

「電源スイッチみたいなものだよ」

「ああ、ONとOFFってことか！なるほどなあ…」

「分かってくれてよかったよ」

「あ、そうだ！もう1回といわずにさっきの打ってくれよ！」

「なんでさ」

「特訓だよ特訓！付き合ってくれるか？」

「仕方ないな、ジューズ1本奢りね？」

「おう！」

それから夕方まで続き、俺様のシュートは1度も止められることもなかった。

だが収穫はあった、俺様のシュートも鋭さが増したし円堂も新しい必殺技を編み出した。

確か「熱血パンチ」だったな。

あれが威力増したら俺様の必殺技も止められちゃうな。

「へへ、特訓付き合ってくれてありがとうな！お陰で必殺技を編み出せたし、今日は楽しかった！」

「それはよかったね、僕も楽しかったよ。時間は大丈夫？」

「へ？うわあ！もうこんな時間だ、母ちゃんに怒られる！」

またサッカーしようぜ！と手を振りながら円堂は去っていった。

本来仲良しごっこなんざくだらねえと思ってたが…

円堂守となら悪くねえと思うのも、円堂の魅力ってことか。

「はっ、馬鹿馬鹿しい。だがまた近い内に会いそうだな、アレは影山が嫌いそうだな奴だしな」

サッカーはこの世界において生きる為の手段でしかない。

だが、今回の件でやつてもいい程度にはなった。

サッカーをやるのなら、盗むのは得点。ボールを奪い、敵を叩きのめしてゴールに打つ。

ゲームとしちや単純かつ奥が深い、楽しめそうだな。

と、ここで携帯が鳴った。

「よお、影山か。仕事の依頼だア？ガキに頼んでんじゃねえよ、他当たりな。……へエ、そいつは面白そうだな。いいぜ、乗ってやる」

影山も用心深いな、今の手駒が潰れた次の手を用意しようつてのは。

謎の隕石の収穫ねえ……どうしたもんか。

ありやあ確かあの財閥に回収されたとかじゃ……

接触してみるとするか……

「なあじいちゃん、今日すげえ奴にあつたんだ！猿良つて奴なんだけど、必殺技も使えてさ！」

「サッカーやる時は雰囲気が変わつてさ、ギラギラした感じになるんだ。打つ瞬間なんてオーラが凄いつていうか……」

「でも、悪いヤツじゃない。そんな気がするんだ！特訓してる時に、俺様はお前が思ってる程いい人間じゃないつて言つてたけど」

「ボールは嘘をつかない、だよなあじいちゃん。アイツの打ったボールは、勝つぞーって感じがしてドドドドドッ！つていう楽しさみたいなのも伝わってきたんだ」

「猿良は認めてなかったけど、きつとサッカーが好きなんだ。だからまた猿良とサッカーしてみたいな。へへ、次会う時には止められるようにまた特訓頑張らないとな！」

第3話

俺様は今、富士の樹海にいる。

まずは現場を見てみるつもりできたんだが…

「そこのお前！サッカーバトルだ！」

「やらねえよ」

「目が合ったらサッカーバトルだ！」

ポケモンの世界じゃねえぞここは。

樹海に来てからこうして何度も何度も挑まれる。

そもそも1人だろうが俺様は。

「見ての通り1人だろうが」

「ならPK戦だ！」

「結局こうなのか…」

と、PKでバトルする訳だが…

「そらよオ！」

「ぐああああ!!」

「守れねえんならゴールでいいだろ、じゃあな」

「おい待て！今のはゴールじゃないぞ！」

「何度やってもいいぜ？そんな時はそのGKが持つかわからねえがな

…」

「ヒツ…」

「わかつたんならどっかに失せな」

はア……つたくめんどくせえな。

つかゴールネットどっから出してんだ？

それから奥に進んでいくと、崖の上にデケエ建造物が出てきた。

アレが正について感じだな。

「こんな所に建物…ねえ。まあ近づいてみるか」

長い道のりを登っていくと、建物の前に見張りみてえな奴が二人立ってるのを見た。

見たとこそここにしか出入口はなさそうだな、行くか。

「おい、ここから先は立ち入り禁止だ。下がれ！」

「まあ待てよ、オキヤクサマとして入れてくれや」

「ただのガキが調子に乗るなよ」

「通すわけには行かん、退かないのなら…」

「実力行使って訳か？やってみなあ！」

「後悔するなよ！」

見張りのハゲが突撃してくる。

それを横に逸れて躲し、腹に蹴りを入れる。

ふっ、この世界ってなあ鍛えれば鍛えるだけ強くなれるんだからいいもんだなあおい。

「おぐっ…！」

「おーおー、ただ蹴り入れただけでダウンたア見張り失格じゃねえかあ？」

「貴様！」

もう1人のハゲがスタンガンを持ち突き出してきた。

が、そんなトロイ動きじゃ俺様には適わねえ。

「おせえ、罨カードオープン！沈黙の邪悪霊！テメエの攻撃対象を変更してやるぜ！」

「な!？」

「やめつぐあああああ!？」

「ハハハハハハ！」

「なんだ…今の力は!？」

「そら隙だらけだア！」

「っ！ぶあああ!？」

足元にあつた石を蹴り、顔面シュート。

痛そうに、フハハハハ…

「さて、お前らは俺様に負けた。敗者には言う事をきいてもらうぜ」

「だ…誰が貴様なんぞに…」

「まあテメエの意思は関係ねえがな」

「なんだと…?」

「魔法カード、心変わり！」

「う、うわああああ…ああ…あ…」

心変わりには対象を自身のコントロール化に置ける効果、相変わらず強カードだぜ。

「さて、中に案内しな！」

「…」

物言わぬ人形に成り果てたハゲが中に入っていく、それに着いていけばいい訳だ。

「旦那様、今1人の子供が侵入してきました」

「子供が…？見張りは何をしているんですか？」

「それが2人がかりで負けた様で、1人が何故か言いなりになっています」

「…ふむ、ではバーン達を送りなさい」

「はっ！」

「さて…何が目的でしょうかね…」

「ここは…研究室か。」

何かわかるかもしれねえな。

「おい待ちな！」

「あん？」

「テメエの相手はこのバーン様だ！」

「バーンだあ？はっ、その髪型の事かあ？」

「この髪型はバーンってなったからじゃねえ！」

「バーン様、相手ペースに飲まれてますよ」

「ちっ！おいお前！何の目的でここに来た！」

「それを簡単に話すとも思ってたのか？頭バーンくんよ」

「ああ!？」

ハハ！面白えなコイツ、煽れば煽るだけ真っ赤になりやがる。

真っ赤な顔したバーン様はくっつかか？

「くたばれえ！」

何処からか出した黒いボールをこつちに向けて蹴ってきた。

わからねえがただのボールには見えねえ。

「ぐっ…！んだこのボール、重すぎんだろ」

「受け止めただと!?!」

予想通り足で受けるが普通のサッカーボールじゃなかった、例えるならトラツクが突っ込んできた衝撃みたいな重さだ。

「そら返すぜ!」

「何っ!?!」

蹴り返すとそいつも受け止める。

成程、普通の人間じゃあねえ訳だ。

「バーン様!」

「下がってるろ!コイツはオレがやる!」

「いいぜ、かかってきな!」

「おおおお!!アトミックフレアアアア!!」

バーンが高く空を飛び太陽の様な紅さと熱がこもったシュートを放ってきた。

成程、イキってるだけあるってか!

「面白い、だか俺様には届かねえ!罫カード、魔法の筒を発動!テメエのシュートをそのまま返してやるぜ!」

「なっ!なんだと!?!」

アトミックフレアが軌道を変えてバーンに跳ね返る。

だがそのシュートは届かなかった。

「バーン様!お下がりを!バーンアウト!!!」

「ちっ、余計な事を!」

「へえ…中々やるじゃねえか」

つかバーンアウトってお前、それこそアウトじゃねえのかそれ。

『そこまでです』

「!」

『バーン、その子供を私の元へ案内しなさい』

「お、オレはまだ負けねえ!」

『控えなさい、私の命令に反するのですか?』

「ぐ…わかり、ました」

「ククク、従順だねえバーンサマ?」

「うるせえ！…着いてこい」

「おお、怖い怖い…」

「さて、君が例の侵入者だね？」

「おう、お前は…コイツは驚いた。まさかホトケサマに出逢うなんてな」

「ブホッ…w」

「研崎？」

「はっ、し、失礼しました…」

「…私は仏ではありません、吉良星二郎です」

「聞いたことあるぜ、吉良財閥の会長だろう？」

「その年でよく勉強していますね、その通りです」

「で、謎の隕石もお前が回収している訳だ」

「成程、それが目的ですか？」

「ああ、端的に言えばな」

「誰の差し金ですか？」

「おいおい、クライアントの正体を言うとも思ったか？」

「でしょうね。確かに隕石は私の手元にあります、渡せませんよ」

「ならどんな隕石なのか情報を提供しろ、出来ねえんなら俺様にも考えがある」

「考えとは？」

「テメエの手駒の数だけ爆発が起こるかもなあ？」

「そんな事…」

「不可能だと思うか？まあそれでもいいぜ、どちらにせよ同じ事だ」

「…ここらでカマでもかけてみるか、引っかかるかどうかは知らねえが

…

何かを企んでますって施設だ、何かあんだろ。

「お前が企んでる日本政府陥落も泡沫の夢になるかもなあ？」

「なっ!?!何処でそれを…!!」

マジかよ、反応見るつもりが大穴引いちまったか。

「おいおい…冗談のつもりがまさかのビンゴかよ」

「く……！」

「まあこれで手札が増えた訳だ、バレされたくなかつたら情報を寄越しな！別に隕石を要求してもいいんだぜ？」

「……いいでしょう。あの隕石はエイリア石と呼んでいます」

「エイリア石……？」

「エイリア石には不思議なパワーが秘められています、所持した者を大幅に強化される効果がありました」

へえ、宇宙にはすげえもんがあったもんだな。

だがそう上手くいくとは思えねえな。

「ソイツはすげえが、デメリットとかはねえのか」

「精神に何らかの影響があり、ある者には洗脳効果が現れていました」

「成程、上手い話には裏があるがお前らにとってプラスしかねえ訳だな」

「これで取引は終わりです、早々に立ち去りなさい」

「へーへー、とつとと退散させてもらうぜ。あばよ」

後ろに振り向き、立ち去ろうとドアに手をかけると後ろから複数人襲ってきた。

馬鹿だな、お前ら。

「わかってんだよ！罨カードオープン！テメエらの自業自得だア！」

襲いかかってきた人数は6人だが、こいつの効果は相手の使役するモンスターの数だけバーンダメージを与える。

吉良星二郎の使役する人間はこの場にいる全員、30人だ。

だからそのダメージは……

「あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あああ!!!」

3万ダメージ……ハハハハハハ！

「主様!!!」

「襲ってきたテメエらのせいだぜ？まだやるのか？」

「く……」

「じゃあな、フフ……フハハハハ……！」

さて、研究所から出てきたが：

「ウウウ…」

「地縛霊、ご苦労」

地縛霊が渡してきたのはエイリア石…の欠片。

流石にデカすぎたのか、だがこれで充分だろう。

「…影山か、依頼してきた例のブツは回収してきたぜ。富士の樹海の麓まで迎えを寄越しな」

『いいだろう、報酬はどうする』

「貸1でいい」

『わかった、ではしばらく待て』

さあて、これ使って何をするのかねえ…

まあ俺様には関係ないか。

そして、1年の時が流れた。

第4話

「……いい加減離れる、いつまで俺様にくっついてるつもりだクソガキ」

「えへへ」

「夕香…お兄ちゃんは寂しいぞ」

「じゃあコレ引き剥がせよ」

「それは夕香が可哀想だろう」

「俺様の身になれよ」

「…嬉しいしかないな」

「ダメだこのシスコン話にならねえ」

俺様は今、雷門中の隣にある病院にいる。

体の不調とかじゃないが、問題は今ここにいる兄妹だ。

歩いていたら小さい子供が道路を渡ろうとしてたら、トラックが突っ込んできた。

流石に俺様が悪党とはいえ、ガキが目の前で死んじまうのは寝覚めが悪い。

それを咄嗟に庇って、お互い擦り傷と軽い打撲で済んだという話だ。

救急車呼んで病院行ったら兄貴の方が飛んできて、あれよこれよと話が飛んで今に至る。

で、何故かガキが俺様に懐いた。ついでに妹が懐いたから兄貴も懐いた。

なんなんだお前ら。

「そういえばお前、木戸川清修のストライカー様だろ？今決勝じゃねえのか？」

「ああ、妹が病院に運ばれたって行って仲間に任せてきた」

「…そういや決勝の相手は帝国か？」

「ああ、長年の優勝校だな」

あー、読めてきたぜ。

大方このストライカーが怖くて、事故を仕組んだな影山。

裏工作には文句はねえがガキを巻き込むなよ、いや中坊のこイツらもだが。

「兎に角、俺様はもう帰る。やる事あるからな」

「えー、帰つちやうの？」

「まだ居ていいんだぞ」

「そもそも何でこんな程度の怪我で病室送りなんだよ」

「父親がここの病院で働いているからだな」

「過保護か」

それだけ可愛いってことか、愛が深いねえ…

まあそれはともかく俺様はこの場に長い事いるつもりはねえ、余計な情が芽生えそうだ。

「じゃあな」

「また会おうね！」

「事故んじゃねえぞ、あと兄貴もしっかり見ておけ」

「ああ、気をつけよう」

そうして俺様は病院を去った。

「夕香、本当に無事でよかった。獏良が居なければどうなっていた事か…」

「お兄ちゃん…」

「…サッカーはもうやらない、木戸川の皆にも迷惑かけたからな」

「え、なんでよ！お兄ちゃんのサッカーしてる姿好きなのに…」

「済まない、だが俺は夕香が心配なんだ」

「もう、過保護なんだから」

「今は夕香の傍から離れたくはない、もしまた何かあったらと考えると俺は…」

「はいはい、じゃあ今は許してあげる！でもまたサッカーはしてね？」

「ああ、約束だ」

『何故邪魔をした』

「やつぱりテメエの仕業か、大方敵の選手の大事なもん奪って抜けさせようとしたってところだろ？」

『そうだ』

「裏工作には別に文句は言わねえ、だがな。ガキを相手にやりすぎた、そんな事しなきゃ帝国のサッカーは弱いのか」

『念には念をだ』

「はっ、怯えるのも大概にしておきな」

『貴様もできる範囲の妨害はするだろう』

「ああ、その通り。だが俺様にも気に入らねえ勝ち方はあんだよ、テメエみたいな悪党には分からない矜恃みたいなもんだ」

『…』

「やるなら手駒を鍛えて実力で叩きのめしな、そうできる環境があるんだからよ」

『ふん、参考にはしておこう』

「で、あのエイリア石はどう使うつもりだ」

『言う必要はないと思うが？』

「誰のお陰で手に入ったかわかってんのか？俺様は何時でもテメエの首を取れるんだぜ」

『私の警備は厚い、割り込む隙はない』

「なら考え直しな、現代の警備なんぞ敵じゃねえ」

『どういう意味…!』

影山の背後から首無し騎士が立ち、刃を首にあてがった。

いつでも殺せるとはこういうことだ。

『一体どこから…この化け物は…』

「これでわかったか、テメエの命の綱は俺様が握ってる事が」

『ふん。あのエイリア石は分析が完了したら飲料水として加工する、体内に取り込めば大幅なパワーアップができる筈だ』

「成程、それでバレねえってことか。いいんじゃないか？」

『ではな、次は邪魔をするな』

「俺様の目の前じゃなきゃ何もしねえよ。じゃあな」

：獏良了、只者ではないとは思っていたがここまでとはな。
野放しにしていたら邪魔な存在になっていた。

実力で叩きのめせ、か。

やはり似ている様で似ていない、だが理解はできる。

負けに何の価値もない、勝者が全て。

だからこそ確実に勝つように工作をする。

：真の強者は圧倒的な力を持ってねじ伏せる、だが石橋を叩いて渡るともいう。

私は間違っていないのだ。

エイリア石の解析もまだ時間がかかるだろう、神の力を手にするのも時間の問題だな。

ククク、ハハハハハハ：

第5話

『現れたのは炎のストライカー、豪炎寺修也だあー!!!』

「…待たせたな、円堂」

「へへ、遅いんだよ!行くぞ皆!!」

「二おう!」

へえ、しばらく姿見てねえと思ったが雷門に居たか。

面白くなってきたな。

「アイツがお前の目当てか?」

「ああそうだ、元木戸川清修のエースストライカー。奴のデータが欲しかったのでな」

「テメエがビビらずに妨害しなけりや前回でわかつただろうによ」

「ふん。おい、撤退だと伝える。データは揃った」

影山が部下に伝えると、帝国サッカーチームが試合を放棄した。

言い換えれば雷門が帝国に勝ったという事でもある。

「あのままやってたらどっちが勝っていたと思う」

「帝国だろうぜ、驚異になるのはGKと豪炎寺だけだ。後は雑魚の集まりに過ぎねえからな」

「そうか。この後時間はあるな?」

「ああ、帝国サッカーチームと練習でもしろってか?」

「そういうことだ、そしてまだ利用価値があるかどうかを見極めろ」

「へえへえ、わかつたよ。少し揉んでやるか」

「では帝国に帰るぞ」

「影山総帥、チームA揃いました。本日はどのような…?」

「鬼道、今からある人物とトレーニングをしてもらおう」

「ある人物?」

「ああ。猿良、入れ」

影山から呼ばれ、一応ジャージとスパイクに変えてステージにあがる。

「おーおー、なんだコイツはって顔だな？」

「獭良了、鬼道と同一年の少年だ。然し、お前達より遙か上の実力だ」
「な、なんですって!？」

「こんな奴が…」

「獭良、自己紹介をしろ」

「獭良了だ。今からテメエらを鍛えてやる特別コーチって訳だが、何も教える気はねえ。とことん潰してやるから覚悟しときな」

「潰すだ?!？」

「舐めやがって…」

「気に入らねえなら実力で向かってきな、ビビってんなら今すぐに帰りやがれ」

「鬼道さん」

「ああ、俺達の力を見せてやろう」

「まとまったようだな、では方針を伝える」

影山から伝えられたのは、1on1で俺と対峙し抜かれたら負けというもの。

俺様が分裂出来りやいいが…ん？そーいや魔法カード「増殖」があったが俺様にも適用されるか？

「最初は寺門、お前が行け」

「ストライカーの寺門か、期待してるぜ？」

「ほざけ、目にものを言わせてやる」

「後は任せたぞ、鬼道」

「はい。両者位置に付け！」

「始め！」

「先手は譲ってやるよ、かかってきな！」

俺様がボールを踏みつけ、寺門を挑発する。

「いくぞー！」

寺門がボールを奪いに突進してくるが、それを軽くいなして突破。そのままゴールに叩き込んだ。

「ゴール！獭良の勝ちだ！」

「くっ、強いな…流石総帥のお墨付きって訳か」

「ま、そこらのプレイヤーよか強いんじゃないかねえか？俺様には到底及ばねえがな」

「いってろ、いつかお前を出し抜いてやる」

「そのいつかが来ればいいな」

と、帝国チームとのトレーニングを行っていき最後のプレイヤーになった。

「さて、最後はお前か？」

「ああ、キャプテンの鬼道だ」

「テメエの中で俺様から奪い取れる確率はどんなもんだ？」

「……貴様は強い、精々5%だろう」

「へえ、随分下にみてんだな？」

「状況把握出来なければゲームメーカーは務まらないんでね、だが簡単には抜かせないぞ」

「やってみな」

鬼道が接近すると、必殺技「サイクロン」を放つ。

突風が襲うが、俺様は逆に風に乗リボールをキープした。

だが流石はキャプテンと言ったところか、着地と同時にスライディングでボールをカットしようとする。

「いい狙いだが甘いぜ！」

ボールを横に飛ばし同時に俺様も横へと飛び、そのまま突破。

ボールはゴールへと突き刺さった。

「やるな、オレもまだまだらしい」

「ここまで反応できたんだ、やるじゃねえか」

「ふっ、遊んでおいて何を言う」

「あの鬼道さんでさえ遊ばれる程度なんて……」

「ああ、信じられねえ……」

「…これで今回はもういいだろ影山！そろそろ俺様は予定があるんだな」

「ああ、ご苦労だったな」

軽く影山と帝国の連中にサヨナラを告げ、帝国学園を去った。

「くそっ！何で俺は必殺技が出来ねえんだ！このままじゃあ豪炎寺なんかになんか……！」

染岡竜吾は帝国との試合の後、夕方になる迄河川敷で特訓をしていた。

目の当たりにした大きい壁、炎のストライカー豪炎寺のファイアトルネード。

雷門のエースストライカーは自分だと自負していたが、豪炎寺がサツカー部に入るのならエースストライカーは……

「豪炎寺に出来て、オレが出来ない訳がねえんだ……！」

染岡はまた、ボールを力任せに蹴るが軌道が大きく逸れた。

飛んだ先に1人の少年が。

「マズいと染岡が危ないと叫ぼうとした瞬間、少年が見向きもせずボールを受け止めた。

「なっ！」

「おいおい、危ねえじゃねえか。買ったばかりのゲームが壊れたらどーすんだ？」

そう、目つきの悪さでは染岡に引けを取らない獏良了であった。

第6話

「お前、確か雷門のFWだったよな？」

「知ってるのか？」

「ああ知ってるぜ、弱小チームの必殺技すらねえFWだろ。そんなじゃあどこと戦っても苦戦するだろうよ」

「テメエ……！」

「オイオイ、そう怒んなよ。事実だろうが」

「……………んな事、俺が1番分かってる」

染岡は項垂れながらベンチに座って、語りだした。

エースストライカーでありながら、強力なストライカーが入部した事によって自身の立場が危うくなっている事。

「で、必殺技を使えばと特訓してたわけか」

「ああ…必殺技さえあれば…！」

「…はあ、こう言うのは柄じゃねえがよ」

「あん？」

「サッカーってのは一人でやるもんか？」

「…」

「違うだろ、11人全員でやるもんだ。欠けちゃゲームにならねえ」

「仲間を見ろってことか」

「はっ、んなもん自分で考えろ」

「仲間…か」

「おい、必殺技習得するんなら多少手を貸してやる」

「いいのか…？」

将来を見据えて恩を売っておくことに越したことはない、それがお人好しであれば尚更。

人の縁ってのは何かを成すとしたら役に立つ、それだけだ。

「構わねえよ、だが俺様が直々に教授してやるんだ。感覚だけは覚えなくてもらうぞ」

「上等だ！よろしく頼むぜ、あー」

「摸良了だ」

「摸良だな！よし、何からやるんだ？」

「まずはボールを蹴るなんざしねえ、他にやる事がある」
「？」

超次元サッカーにおいての必殺技は、使用者のイメージや概念の捉え方で発動する。

ならば、先にイメージを固める方が習得しやすい筈だ。

ここまで伝え、染岡に問いを投げる。

「お前は自分が必殺技を使うとしたら、どんな技になると思う？」

「あん？そりゃあ……豪炎寺みてえな」

「それじゃダメだ、テメエにはアレは似合わねえ」

「どういう事だよ」

「先ず豪炎寺の事を頭から外せ、自分だけの必殺技を考えろ」

「自分だけの……」

「例えば、俺様は遊戯やオカルト。そして価値のある宝が好みだ。オカルトなら例えば幽霊や怪奇現象だよな？」

「あ、ああ」

「だから俺様がイメージした必殺技を即興で作るなら……染岡、ボールを蹴りながら俺様に向かってこい」

「わかった」

染岡がボールをキープしつつ向かってくる。

俺様は脳内にイメージを固定し、こんな必殺技になると強く思い込み……

「ポルターガイスト！」

魔法カードに描かれているゴーストが染岡に襲いかかり、ボールを取り上げて俺様の元へ転がってきた。

「な、おい。これ今作ったってのか？」

「その通り、こんなもんは才能だとかは関係ねえ。思い込みの力だ、理解したか」

「……なんとなくな」

「じゃあ教えるのはここまでだ、足りねえピースは自分自身で考えろ。」

俺様はゲーム攻略しなきゃ行けないんでね」

「ありがたいな、後は自分でやってみるぜ！」

「じゃあな」

「…はあ、俺の必殺技か。どんな必殺技を使っただろうな俺は」

河川敷の土手に寝転がり、夕方の空を眺める。

獭良の言う様にイメージを思い浮かべようにも想像がつかない。

それに、未だに脳内にある豪炎寺の姿が俺を焦らせている。

「あれ、染岡！こんな時間まで特訓か？」

「円堂……」

「よっと」

円堂が俺の横に寝転がって空を見上げた。

姿を見るに、円堂も特訓をしてたに違いない。

「それで、何の特訓してたんだ？」

「必殺技だよ、豪炎寺にばっかいい顔はさせねえ！」

「染岡……」

「だが、な。さつき言われたんだ、豪炎寺のことばかり考えんなって

「よ」

「？」

「獭良って奴にな。俺がむしゃくしゃして蹴ったボールが獭良の方に

飛んでいっちゃまって成り行きで必殺技の習得の仕方を……」

「獭良!？」

「うおっ!？」

円堂が急に飛び起きて叫ぶもんだから驚いちゃった、知り合いなのか？

「何だよ急に、どうした？」

「あ、いや。小さい頃にあった事があるんだ、そつかまだこの街にいたんだな」

「そうなのか……」

「でさ、さつきの続きだけど習得出来たのか？」

「いや、全然だ。出来ない原因がわからねえ、獭良は気づいてるっぽい

けどな」

「そっか」

円堂が再び寝転がり、こちらに顔を向けた。

「俺が言えることはさ、染岡は染岡だって事だな」

「はあ？」

「豪炎寺になろうとするなよってこと、お前は染岡竜吾だ！染岡は染岡のサッカーをすればいいんだ」

「俺の…サッカー…」

「おう！自分のサッカーをすれば、必ず結果は出るはずだ！お前なら出来る、なんてたって俺達のストライカーなんだからさ」

そういう事か、結構簡単な話だったな。

俺は俺の、サッカーをすればいい。俺だけの…！！

「ありがとうな、円堂。見とけ、俺の必殺技を！」

「おう！特訓だ！」

円堂がゴールまで走っていく。

…：…円堂と猿良のお陰で自分を見失わずにすんだ、礼は結果でだす

！

雷門のFW、染岡竜吾はこの俺だ！

第7話

雷門中が順調にフットボールフロンティア予選を勝っていく中、とある少年達は闇の中にいた。

闇野カゲトと獺良了である。

とある一件で闇野と接触し、手の内に収めた獺良は役に立つ駒とすべく闇野を鍛えていた。

「ぐ……うああああ!!!」

「こんくらいで根をあげんなよ、テメエで決めた道なんだからよ」
「わか……っっている……!」

闇野は元々闇に適性があった、バクラやマリクのような闇の存在に。それを見抜いた獺良は闇野を闇のゲームと同じ要領で、深淵の闇にまで引き込み精神攻撃に耐えるというものだ。

襲い来るおぞましいモンスター達とのバトル、引き裂かれるような痛みに耐えるもの、世界中に責められ味方1人となった状況にと様々な試練を進む。

闇野の心と体は既にボロボロだった、しかしどれだけ痛めつけられようとも折れることはなかった。

その心の奥底に、バクラが居た。

自身が例え悪党でありクズであっても、己が定めた道と信念を貫くその姿に強い憧れを抱いた。

見せられた古代の記憶、そして己の命をかけたゲームの記憶。

自分は悪党にはなりたくは無いが、それでも憧れを抱いたのはバクラのカリスマ性のせいなのだろうか。

こんな所で死ぬ訳にはいかない、必ず追いついてみせる。

漆黒の闇の中でも鈍く輝く存在に、手を届かせてみせるんだ。

バクラの様に!

「負けるかアアアアア!!!」

「お?」

闇野は迫り来る闇を打ち消した、それは己自身に眠る力の枷を外したのと同義である。

猿良は思わず口元を歪ませ、その様子に驚嘆と歓喜を露にした。

この試練を始めて2週間程度でここまでやるとは思わなかったのだ。

「はっ、ハハハハハハ！おめでとうカゲト、テメエはこれで誰にも屈する事も真の負けもする事はねえ。新たな闇の住民の誕生だな」

「……………これが、俺の力なのか」

闇野から溢れ出る闇のオーラが禍々しくうねりを上げている。

しかし猿良から出ているのはそれよりも遥かに大きく深いオーラであるのを見た、目指す場所にはまだ至らないのだ。

「そうとも、お前の内に眠っていた闇の枷が無くなったんだ。手加減こそできるだろうが、敵対者には容赦なく力を振るえるだろうぜ」

「……………感謝する、猿良。これで俺は強くなれた」

「構わねえさ、自分のモンは自分で育てる主義なんでね。お前はこれからどうする？」

「予定通り雷門のサッカー部に入るつもりだが、その前に武者修行とする。俺の力、そして猿良から譲り受けたこの”力”も使いこなさねばならないからな」

「そう言い残し、闇野は去っていった。

「あ？そーいやアイツ連絡手段持ってたか？」

「そう思つて闇野を呼び止め、あるものを仕込んで今度こそ別れた。

円堂はこの日、染岡と豪炎寺と共に円堂宅の一室に揃っていた。理由は新しい必殺技考案と、猿良の事である。

「で、お前ら何か浮かんだか？」

「現状、俺だけの必殺技はファイアートルネードしかない。染岡もな」
「ああ、だから先ずはもう一つ必殺技を自分のものにしてからになるな」

「そつかあ……………こんな時に猿良はなんていうかな」

「固定概念を何とかしろつて言い出しそうだな、アイツ」

「……」

豪炎寺が何か考える様に視線を落とした、円堂は円堂で擬音ばかりの説明をするも染岡には全く伝わっていない。

「ググツと来てバツ！からのドカーン!!!」

「いや分かるか!!!」

「なあ」

「あん？どうした豪炎寺」

「…今まで自分達の必殺技を重ねて協力技を生み出すってしてきたが、別にオリジナル技を編み出したって構わないんじゃないか？」

「言われて見りゃあ…確かに」

「なるほどなあ、それは盲点っていうか」

「ああ、凝り固まった考えは視点を狭めるな」

「それにイナズマ落としもどっちかの技の掛け合わせじゃない」

そして、どんな案がいいかを改めて話し合うのだった。

第8話

「さあ試合は佳境に入っております！木戸川専修VS雷門!!強力なトライアングルZを何とか壁山と栗松、そして円堂3人がかりで止めています！次はこうは行かないでしょう！絶対絶命か!？」

木戸川専修との試合はまさに劣勢、豪炎寺と染岡による必殺技は未だ完成せず何とか1点取った。

しかし、3人技のトライアングルZを2度止められず2対1となっているこの試合。

全ては円堂、染岡、豪炎寺の新必殺技にかかっていた。

「キャプテン！もう限界でやんす！」

「円堂！」

「栗松、半田！」

「キャプテン、新必殺技まだなんですか!？」

「あと少し…あと少しで出来そうなんだ…！何が足りないんだ！」

「くっ、皆！円堂に負担をかけさせるな！全力でカバーしろ！」

風丸がDFとMF陣営に指示を飛ばし、円堂のカバーと相手の壁になるべく立ち塞がる。

その間、木戸川専修の選手も猛攻を仕掛けていた。

皆が疲弊していく中、豪炎寺と染岡も焦りが見えている。

「おい豪炎寺！もうダメ元でやるしかねえ！」

「…そうだな、ここで完成させなければ俺達は前に進めない！」

「円堂は絶対を守る！前に出るぞ！」

『おおっと豪炎寺と染岡が上がっていく！これは雷門特有のGKを信じての突貫か!』

「アニキ！豪炎寺の野郎が上がってく！」

「へっ、構わねえ！オレ達のトライアングルZは最強だ、止められるはずがねえ！」

「おう！」

(豪炎寺と染岡……皆オレを信じてる、その想いを無駄にはしない!!)
「来い！」

「トライアングルZ!」

「キャプテン!」

三兄弟が放つ必殺技を栗松の体を張ったブロック、壁山のザ・ウォールで対抗するも抜かれてしまう。

しかし、誰もが諦めていない。

円堂はやつてくれると信じているからだ。

「そうだ!何もゴッドハンドは受け止めるだけじゃなくていい!」

円堂はゴッドハンドの構えを片腕も加えて掲げ、両手にゴッドハンドを形成。

飛んでくるボールに片方のゴッドハンドをぶつけた。

「おおおおおおお!!ばくれつ!!ハンドおおおおお!!」

ゴッドハンドの拳を握りしめ、ボールにパンチングの嵐を見舞う。

ゴッドハンドと爆裂パンチの合わせ技、そろそろ強いに決まってるのだった。

「なっ!?なんだあアレ!」

「ゴッドハンドを両手に出して殴りまくるとは……大介さんでもやったことないだろうに……」

「し、新必殺技が出たところで!」

「オレ達のトライアングルZは破れない!」

「みたくない!」

「とど……けええええええー!!!」

ドン!という破裂音の後にボールは完全に跳ね返り、そのまま前線に上がって行った豪炎寺と染岡の元に飛んでいく。

信じられないと固まる木戸川専修チームに、監督が声を上げるがもう遅い。

チームの想いが乗った熱いボールは、両者に委ねられた。

「へっ、やっぱり円堂はすげえな」

「ああ、俺達も負けられないな」

「よしやるぞ豪炎寺!!」

「おう!!」

染岡がワイバーンのオーラを纏ったボールを上空に打ち出し、豪炎

寺がそれに従い上昇。

「ここまでではドラゴントルネードと大差ないがここからが本番だった。」

「おおおおお!!」

豪炎寺の炎を纏ったかかと落としでボールを撃ち落とし、再び染岡へ。

「これがあ!!俺達の必殺技!!」

地に落ちる瞬間、蹴る!!

「二竜点晴!!」

赤く哮る炎と蒼く舞う炎が交差し、竜巻の如くゴール1点に突き進む。

突き進むドラゴンのオーラは木戸川専修側のGKを打ち破った。

『決まったー!!雷門の2人のFWによる新必殺技で追加点!追いつきました!!』

「よっしゃー!!すげえぜ染岡!豪炎寺!」

「ふっ」

「見たか三兄弟!」

流れは完全に雷門にあり、再開のホイッスルが鳴るもDF陣が意地を見せボールは再び2人に。

決着の時は近い。

「わかつちやいたが、今回も雷門の勝ちだな。壁を打ち破る力はその器と一緒か」

「俺様にとつちや苦渋を飲まされた腹の立つ記憶だが、使う分にはこれ以上ないのも……」

「くくく……何処まで上がってくるのか楽しみだ、あの世宇子中下して尚世界には届かねえからな」

「そろそろ接触していくか、彼処に」

獏良は木戸川専修から離れ、闇に消えていった。

第9話 前編

愛媛ってのはイメージとして蜜柑とかがあるが、そんな事は俺様にはどうでもいい事で。

何でこの愛媛の、それも人の気配があまりない埠頭にいるか。理由はここに来たら何かがある、つてのを感じ働いたからに他ならない。

夕焼けがオレンジに染めるこの埠頭、サスペンスドラマなら殺人事件や解決編でもやってそうだが。

なんて頭の悪い考えをしていたら、隅っこの方にポツンと黄昏ているモヒカンがいた。

倉庫の壁に寄っ掛かって、夕日を眺めて遠い目をしている。

…絶対アレは映像に残しておいた方がいい、今後使える（弄るのに）

「はあ……つまんねえなあ」

「なら、カードゲームでもするかい？」

「!!誰だ」

「猿良了…お前と同じ悪党だよ」

「はっ、その悪党様がこの俺に何の用だよ。カードゲームなんざした事ねえぞ」

と言いつつも、此方に歩いてくる。興味はあるようだな。軽く説明してやると、簡単に理解した。

…デュエルモンスターズってのは結構難しいんだがな。

「今回は俺様の予備のデツキをくれてやる、そいつで戦ってみな」

「お前に有利なもんじゃねえだろうな」

「んなつまらねえ事なんぞ、こつちから願ひ下げだぜ」

「そうかよ、んじやまあ始めようぜ」

「デュエル!!!」

〜30分後〜

「ちっ！クソ……負けた」

「俺様の勝ちだな、まあ初回なんてそんなもんだ」

「……次は負けねえからな、バクラ！」

「はっ、次も勝ってやるよ」

モヒカンもとい不動明王は物凄い目付きでこつちを見て吠えた。
弱い犬はなんとやら、とも言うが間違はなくコイツは狂犬の類だ。
それも頭のキレル、強い勝負感のある強者。

「なあ、不動」

「あ？」

「デュエルに置いて最も大事なもんってのは何だと思う」

「そんなもん、手札の強さだろ」

「成程、確かにそれも重要だが…もつと大事な事がある」

「カードの強さか」

「違う、運命力だ」

「はあ？」

俺様が見てきた強き決闘者は、ここぞと言うところで最適なカードを引いてきた。

アテムや城之内、海馬がそれだ。

「目に見えねえものだが、馬鹿に出来ねえ。窮地に立った時、その状況を覆せるカードをドロー出来る…それが運命力だ」

「…鍛えてどうにか出来るものじゃねえじゃねえか」

「ヤツが言うにはカードを信じ、デッキを信じる。それが重要だとよ」
「信じる…」

「よく考えりや、テメエの命預ける剣を信じねえで戦うなんざ有り得ねえ。テメエが信じなきやデッキも答えねえ」

「…」

「ま、俺様は決闘者ではねえが…必要ならとことん信じてやるさ。テメエはどうだ」

「はっ、信用信頼なんてくだらねエが…勝つ為ならそう考えてもいい」

不動は不敵に笑みを浮かべて、カードを掲げた。

「…ところで決闘者つてのは今どれ位いるんだ？」

「俺含め3人目だ、お前は」

「滅茶苦茶過疎ってんじゃないか!!」

「仕方ねえだろ、そもそもこの世界じゃ存在しねえカードだからな」

「存在しないだど？」

「このカード…というより、描かれているモンスターは古代エジプトから存在している」

「はっ？」

「それ等のモンスターや魔法効果、罫はそれらを再現した物がこのカードって訳だ。デュエルは俺とあと一人としか出来ねえが、本来の使い方はこれだ」

理解できないという顔の不動にわかるように、俺様は死霊騎士デスカリバーナイトのカードを出す。

闇の力を込めて不動に見せ、デスカリバーナイトをその場に召喚させる。

「な、何だど!?具現化しやがった!？」

「これが、俺の力だ。モンスターを具現化させ使役する、闇の力を保有する俺様と弟子だけの力だ」

「中二病みたいな事抜かすな」

「黄昏てた奴に言われたくねえな」

「ああ!？」

「でだ、その闇の力つてのは俺様の存在そのものだ。この力を使うつもりなら、俺様をデュエルで負かしてみろ。サッカーじゃなくな」

「ってサッカー出来んのかよお前」

「当たり前だ、天才ゲームプレイヤーの俺様に出来ねえゲームなんざねえよ」

「ならサッカーでも勝負しやがれと、不動がサッカーボールを持つてきた。」

「大方デュエルじゃ負けたがサッカーなら負けねえってところか？」

「丁度いい、ここらでわからせてやろうじゃねえか。」

「勝負の内容は相手ゴールまで突破出来たら勝ち、それでいいな」

「問題ねえ、どっからでもかかって来やがれ!」

「ふっ、プレイ開始だア!」

第9話 後編

「行くぜ猿良、お前の余裕の笑みを苦痛に変えてやる」

「へっ、やってみな!」

先行は不動、蹴り出したボールはオレの胸元に飛んできた。

これは見覚えがある、ジャツジスルーだ。

「オラくらいなア!」

「てめえがな!」

「何だ?!」

飛んできたボールをそのまま蹴り返し、不動に当てる。

「審判の目を誤魔化しながら妨害するんなら、カウンター気味に決めるんだよ。こんなふうにな!」

不動が無意識の内に当たりに来るようにボールで誘導、周りにわざとではないと思わせる事で誤魔化す。

不動の足元にボールを落とし、そこに合わせて蹴りを入れる。

ボールのカットする過程で崩す算段だ。

「おらよ!」

「があ!」

所謂その相手1回だけの初見殺し。

相手の足元のボールと共に蹴り崩し転ばせる。

見事に引つかかった不動は転び、そのままシュートを決めてフィニッシュ。

「今回はオレの勝ちだな」

「チツ!次はこうはいかねえ!構えろ!」

闘志を燃やす不動を見て、こっち寄りの思考しているのに熱いやつとは益々決闘者に向いているなど実感する。

ふはは、楽しくなってきたぜ。

「いくぜ!」

繰り出す必殺技はまぼろしドリブル。

念による幻覚を相手に見せて、まるで2人に分身して突破してくる様に錯覚させる技だ。

そのまま追い抜くかと思ったその時、不動は俺の前に立ち塞がった。

「捉えた!」

「やるじゃねえか、だがそう上手くはいかねえ」

技を中断しボールを上空に飛ばして、オレ様自身も飛び上がった前に落とす。

本来ムーンサルトという技になるが、着地した後必ずポーズをとってしまう。そんなもん隙になるだけだからやらない。

「しまった……!」

「喜べよ不動、さっきの技を破った……いや俺のだす技に反応できたのは今まででお前だけだぜ」

そしてゴールへとシュートでおしまいかと思ったが……

「おおおおおおお!!!」

かなりのスピードで戻ってきた不動がボールに蹴りを入れてブロックにかかる、だが僅か間に合わなかった為そのままゴールを突き破った。

予想以上……いやそれ以上に強いじゃねえか、ハハハ!

「ゲームセット、中々楽しめたぜ不動」

「クソツタレ……」

「まあ落ち込むな、オレ様が上でお前が下って訳だ。上に上がれば良いだけなんだからよ」

「……けつ、今に見てる糺良。いつかテメエをぶっ潰してやるからな」

「まあそんな事はどうでもいい、それよか大事な事がある」

「あ?なんだよ」

「急がねえと飯が食える店がしまつちまう時間だぜ」

「……早く言えよ、こっからだといふ歩くぞ」

「よし、飛べ不動」

「は?」

「ニワトリみてえな頭してんだから飛べんだろ、ああニワトリは飛べ

ねえんだったなハハハ！」

「上等だ今すぐぶっ潰してやるから動くな」

「お断りだぜ！」

「おいこら待ちやがれクソ猿良ア！」

「猿良はまた手下を増やしたようです」

『そうですか、彼は有能ですか？』

「はい、あの猿良から一本取っていました」

『なるほど。くくく…この調子でどんどん増やして言って欲しいものですね、何れにしても全て私の駒となるのですから』

「そうですね」

『では引き続き監視をお願いしますね』

「了解しました、研崎様」

ふふふ、はははははは！

エイリア石の研究が終われば、無理矢理にでも手中に収められる！
そして旦那様に変わり、私が世界を支配するのです。

エイリア石の邪悪な力によって！

その為には猿良、お前には手下を増やし力をつけてもらわねばならない。
奴の力さえこちらのものにすれば敵う敵などいなくなる！

ひひ、ひやはははははは！

！

なんだ、いきなり悪寒が…

「おい猿良、何食わぬ顔して俺の唐揚げ取ってんじゃねえよ」

「共喰いを防いでやってんだよ、オレ様に感謝して欲しいくらいだぜ」

「お前本当にいい加減にしろよ」

第10話

不動と別れを告げた後、神と名乗る変質者を痛めつけて東京に帰ってきた。

雑魚だったろ、相手。とどつかのカニが言ってるような電波を感じ取ったがそれはまあ別にいい。

今回は手に入れた神のアクア、奴らは薄めて飲んでいたようだが原液となれば一体どれほどの力と代償を得る事になるのか。

結論はかなりヤバイ、としか言い様がない。

エイリア石で作られているであろうこの原液、身につけるだけであれだけの効力を発揮する物を体内に直接取り込むのだ。

力に耐えきれずに身体は死に絶えるのは想像に容易い、がそれを悪用するのがこの俺様である。

「で?どうやって嗅ぎつけたか知らねえが、力が欲しいってか?」

「ああ、貴方は他人の力を増幅できる力があると聞いた!」

「クツクツク、成程な。丁度いい、最近飲めば己の力が何倍にも高まるモンを手に入れたんだ」

そう言っつて原液が分けられた小瓶を投げ渡す。

さあて…どんな反応を引き起こすか楽しみだぜ。

「これを飲めばいいのですね?」

「おう、あつという間だぜ」

「…!これは、ハハハハ!力だ…力が湧き出してくる!!これで私は誰にも負けない!」

「おめでとう、つかの間の幸せを楽しむんだな」

「あ…?それはどういうこ…うぐ!?!」

そいつの身体はどんどん膨れあがり、そして爆発してしまった。

肉片が顔に付いちまったが…成程、こいつア原液は使えねえな…ハハハハ!

…そーいやコイツ誰だったんだ?

つて、確か雷門とこの元監督か…?

影山に捨てられた哀れなオッサンか、可哀想になあ。

「ま、もう俺様には関係ねえか。久しぶりにカードでも集めに行くかねえ…」

「…占いの館？如何にも胡散臭そうな匂いがするな、イイね入ってみるか」

黒のカーテンをくぐると、女が2人その奥に男が1人座っていた。額に超と書かれたバツクルの様なものを付けている、文字通り超怪しい人物に見える。

「ようこそ、占いの館へ。君も噂を聞いてやってきたのかな？」

「通りがかりなんです、占って欲しいことが丁度あって…」

「安心なさい、この狐蔵乃様は何でも見通してくださるのよ！」

「狐蔵乃様にかかればきつとわかってしまうわ！」

「その通り！では何を占って欲しいのかな？」

「実は…」

「成程、サッカーの必殺技をタダで教えてくれると言われたが詐欺かもしれない。それを占って欲しいのだね？」

「うん…わかるかな？」

「勿論！だがその前にお金は払ってもらおうよ、お金は持つてるかい？」

「いくらでやってくれるの？」

「イチマンエン！一万払えばやってあげよう」

狐蔵乃は悪どい笑みを浮かべて言い放った。

ま、今の俺様は主人格サマの姿だからな…絶好のカモと言ったところか？

「はい、一万円だよ」

「Good!では始めよう…むむむむ!!これは…!」

「何かわかったの!？」

「わかったぞ、君が聞いたその話は全くのパチモノさ！騙されるところだったね」

「因みにイメージとか浮かんできたのかな？」

「ああ、大男に話しかけられて断りきれなかったんだらう？」

「凄い！よくわかったね」

「そうだろうそうだろう。さ、今日はもう帰りましたまえよ」

ふつ、やはりコイツは詐欺で儲けてんだな？

なら騙されたって文句は言えねえよな！

「なっ!?す、姿が変わった!？」

「テメエが詐欺で儲けたってのはもう分かっているんだぜ、狐蔵乃よお。

ならその金が無くなったとしても何も言えねえ筈さ」

「なんだと…?」

「暇つぶしにはちようど良かったぜ、こいつを喰らいな！」

俺は狐蔵乃の頭を掴み、悪霊のイメージを叩き込む。

モンスターとしては怨霊集合体！

騙されて死んでいった奴らを厳選してやった、悪くねえ寝心地の筈

だぜ。ハハハハハハハ！

「なんだコイツらは、やめろ…やめてくれ！僕は、僕は…あああああ

!!!」

「おっと、このセリフでメねえとな。運命の罰ゲーム！」

なんてな。

女二人もいつの間にかどっかに行つてやがるし、こいつの持ち金

貰つていくかね。

おお、30かそこらあるな。いい稼ぎしてんなおい。

「あ…?コイツは…魔法カード？」

予見通帳…ねえ、成程。使い勝手良さそうじゃねえか、だが待てよ

?

どこでカードを手に入れやがった、この世界じゃカード自体存在し
ねえ筈だが…

「退屈しなくて済みそうだな」

蹴球の盗賊王外伝

〈豪炎寺兄妹〉

「お兄ちゃんパース！」

「ああ」

とある住宅街の公園で、仲睦まじい兄妹がサッカーボールで遊んでいた。

その兄妹は豪炎寺修也とその妹、豪炎寺夕香。

そしてその場にはもう一人、心底納得いかなそうな顔でベンチに座っている少年がいた、言うまでもなく獺良了である。

「はア……何で俺様が付き合わなきやならねえんだ」

時は数分前に遡る。

獺良は徹夜明けで、自宅となったホテルへと向かっている途中に豪炎寺兄妹と出くわした。

夕香の押しの強さは分かっていたので、きつさと挨拶して帰ろうとすると案の定捕まった。

「今からお兄ちゃんとサッカーの練習するんだ！」

「そうか、じゃあ楽しんでこい。俺様は帰る」

「まあまあ、こつち来てよ」

「おい引つ張るな、豪炎寺兄お前から何とか言え！」

「ふっ、夕香。あまり困らせるなよ」

豪炎寺兄が俺様の肩にポンと手を乗せてぐいっと押してきた。

ちがうそうじゃあない。

「言動が一致してねえぞオイ、持つ肩は夕香の方だ。いや味方する意味でじゃねえけど」

「行こつ、獺良お兄ちゃん！」

「ほんの少しだけ付き合ってくれ、獺良」

「テメエら……はア、少しだけだ」

と、言う訳だった。

以前までの、いや、馴れ合いなんて俺様がするのは柄じゃない。

まだ俺が甘いのもあるんだろう。

…こう考えるんだ、この借りはいつか役に立つと。

「行くよ、お兄ちゃん！」

「こいー！」

「れっぷうダーツシユ！」

「!？」

「ただのダツシユじゃねえか」

「ぶー！いつか物にするもん！」

ぶんすかと文句を垂れるクソガキ夕香を鼻で笑って流す。

しかし、ただのと言うには惜しいものであるのを豪炎寺兄と俺様は分かっていた。

何せ地面が焦げていたからだ。

「おい豪炎寺兄、うかうかしてたら抜かされるぞ」

「ふっ、早々抜かされないさ。俺はお兄ちゃんだからな」

「お前初期からキャラ変わってねえか？」

「俺は生まれた時から夕香派だ」

「だめだこいつ」

「お兄ちゃん達さつきからなんの話してるの？」

「なんでもないさ、夕香」

「なア、もう帰っていいか」

「ダメー！（だ）」

なんなんだお前ら。

「ねえねえお兄ちゃん、獭良お兄ちゃんってどの位強いのかな？」

「サッカーか？」

「うん！」

「そうだな……」

豪炎寺修也がサッカーをしている獭良をほぼ見た事がない。

しかし、夕香をトラックから救い出したという事はスピードに関しては間違いなく凄いもの筈。

蹴る威力は、1度だけゴールに叩きむのを見た所から察するに自分

以上なのは确实だった。

コントロールも、数メートル先のゴミ箱に空き缶を入れられたので良好。

「少なくとも、お兄ちゃんが本気でやっても通用しないだろうな」

「へえ、猥良お兄ちゃん凄いな！」

「だが夕香、俺もいつか猥良を超えるからな。応援してくれるか？」

心配そうな兄の顔を見た夕香は、それを払拭するような笑顔で伝えた。

「勿論、お兄ちゃんは私のお兄ちゃんだもん！ずっと応援するからね！」

「フツ。期待していてくれ」

「うん！」

「ところで夕香」

「？」

「猥良の事をどう思っている？」

「どうって？」

「その……男の子として意識しているのか？」

「よく分からないけど、カッコイイなあって思ってるよ？」

「……今度会ったらお礼をしなくてはな」

「??？」

!?

な、何か寒気が……

誰が噂してやがんだ？

まあいい、それよりも面白そうな奴を見つけたな。

闇野カゲト、ファイアトルネードと対を成すダークトルネードを使う人物。

恐らく名前の如くの特徴を持つに違いない筈だ。

何せ俺様の闇に勘づいていた様だからな。

ハハハハハハ、使える奴は嫌いじゃねえ。

精々俺様のコマとして働いてもらおうか、カゲト。

今は楽しく暮らして…いや、あいつはボツチだから楽しくはなさそうか。

アテム、マリク、そして俺様。3人交われば…

うるせえに決まってんだろ、どうすんだこの状況。

河川敷のサッカーコートで、俺はベンチに座っている。

そして、コート内には2人のバカが騒いでいた。

「ヴェヘヘヘ…遊戯イ！オレの化身、ラーの翼神竜を倒せるかなア？」

「マリク！貴様を倒し、ガリガリ君リッチを手に入れるのはこのオレだぜ！行け、化身…オシリスの天空竜！」

「くだらねエ戦いに神を召喚させてんじゃねエよ!!!」

そもそも何だよ化身って、よく分かんが時代の先取りし過ぎじゃねえのか。

オイ見てみるこの空を、曇ってきて雷までなってるぞ。さっきまで晴れだったのによ。

気軽に天候を変えるな馬鹿共。

「くだらなくないぜバクラ！あのリッチは限定商品だぜ」

「その価値もわからんとは盗賊王の名が廃るぜエ」

「ぽっと出の闇人格に言われたかねえよ！」

物凄いどうでもいい戦いに巻き込むな、頭痛くなってきたやつが…

「オレから行くぜえ…止められるもんなら止めてみなあ！ゴッドブレイズキャノン！」

「無駄だぜ！光の護封剣！貴様のシユートは通らないぜ！」

「だがオレはサイクロンを発動するぜえ、これで突破だぜえ！」

「そいつはどうかな」

「なにい!？」

「その前にオシリスの天空竜で殴るぜ！」

「ただの力押しじゃねうわああああああ!!」

「おい、サッカーしろよ。イエローカードどころかレッドカードだぞ王様よオ」

「そんなものは魔法の筒で跳ね返すぜ！」

「審判を退場させようとすんな!!」

仮にもお前正義側だったろうが、俺様よりあくどい事考えてんじやねえよ。友情壊れんぞ…

「くくく…中々やるじゃねえか遊戯イ、ア、ハハハハハア！」

「この攻撃に耐えるとはな、マリク！」

「だからサッカーしろよ、プレイヤーにダイレクトアタックするな」

「だが遊戯イ、この瞬間隠れ兵を発動するじえ…」

「なんだと!？」

「お前友達いねえだろ」

「ぐはあ!？」

「マリク！バクラ、なんてことを言うんだ！本当の事でも言っただけじゃない！」

「お前もサラツと酷いこと言ってるからな?？」

勝手にダウンしたマリクを起こしながらとどめを刺す王様。

もうお前から帰れよ。

「貴様らといた数ヶ月…悪くなかったぜ…」

「ピッコ…マリクウウウウ!!」

「キャラ壊れてんだろお前ら、今更だけだよ」

なんで作画までDBみたいになってんだよ、おい。

ファンに怒られるぞ。

…もういい、帰るか。アホが移る…

「勝手にやってろ、俺様は帰らせてもらうぜ」

「俺も行くぜ」

「オレもついてくぜえバクラ」

「来んな、帰れ」

「AIBOには今日は泊まってくって言ったから大丈夫だぜ！」

「オレも姉上様には了承を得てるぜえ…ビンタされたけどなあ」

「知るか。てかなんでビンタされてピンピンしてんだよ」

誰か助けてくれ。

で、俺様のマンションまで帰ってきた訳だが…

「おい遊戯イ！そこでパスだせえ！」

「まだ俺のバトルフェイズは終了してないぜ！」

「そういう問題じゃねえよ、お前サッカー理解してるのか？」

テレビゲームのサッカーフロンティアく熱戦のサッカーフィールドくを何故かプレイしている。

架空の人物で作られている帝国や伊賀山等のチームを操作して、遊ぶゲームなんだが…

仲間とか友情やら言ってた王様が単独でプレイして、マリクがチーム戦でやれって言ってるの逆だろ。

「いけ！ローリングキックだ！」

「決まるのか!？」

「普通にスピニングカットで止められてるな」

「羽賀アアア!!」

「汚いぜえ羽賀アアア！」

「羽賀じゃねえよ、おかつぱなだけで羽賀扱いはやめろ。後汚い事やってるマリクが言えたことじゃねえ」

相手チームのカウンターでDF陣も跳ね除けて、エースストライカーの放つ皇帝ペンギン2号で点が決まった。

王様お前一応ゲーム得意な筈だろ、どうなってんだ。

「こうなったら海馬を呼ぶしかないぜ」

「三神が揃えば勝てるぜえ」

「これ以上カオスにすんな、いいからもう帰れや馬鹿ども」

悪い夢ってのはこの事だな…はあ…

「…夢、か」

目を覚ましたらベッドの上。

安心した矢先、携帯に二通のメールが届いていた。

「昨日は楽しかったぜ、また遊んでくれ」

「次はドリラゴを送り付けるぜえ…ヴェハハハハ！」

「夢じゃねえのかよ!!!」

横に具現化していたダークネクロファイアが朝食の準備をしていた

が、その目は同情の色が映っていた。

なんで勝手に具現化して朝飯作ってんのかはさておいて、もう二度とあのバカ達と会わないように願うのだった。

クリスマス

「クリスマスプレゼント交換パーティ？」

「そうよ円堂君、年中サツカーしか興味のない貴方でもクリスマス位は知っていたようね」

「バカにすんなよな夏美！俺だってクリスマスは知ってるぞ！」

「それで、参加するの？しないの？」

「勿論するぜ！ほかの皆もやるんだろ？」

「その様子ね、貴方も誘いたい人がいれば誘って頂戴ね」

「おう！」

「って事があつただけだし、豪炎寺は獏良が何処にいるかわかるか？」

「ああ、夕香が場所がわかるらしくてな。今多分誘いに行ってるはずだ」

「…何で夕香ちゃんがわかるんだ？」

「さあ…な、看護婦さんによれば乙女の勘だとか」

「おとめのかん?？」

「…はあ」

獏良、夕香に何かあれば俺は怒るからな。

まだお前に義兄さんと言われる筋合いは…ない!!

「お、おい豪炎寺？炎の魔神が浮かび上がってきたぞ!!」

「っ!？す、すまない円堂。ちよつと気が立っていた」

「何か気になることでもあるのか？」

「…獏良にだけは義兄さんとは呼ばれたくない、夕香はまだやらん!!」

「妹想いなのはいいんだけど、あまり口出すと嫌われるぞ？」

「キャプテンが…」

「まともなことを…」

「言ったでやんす!!」

「おい壁山鬼道栗松どういう意味だよそれ!!」

まさか円堂にそう言われてしまうとは…
俺もまだまだだな。

と思っっていたら鬼道が話しかけてきた。

「豪炎寺」

「なんだ？」

「肅清する時は俺も共にやろう」

「鬼道…!」

やはり持つべきはお兄ちゃん同盟だな…!

「ねえお兄ちゃん、私がもしも嫁ぐってなってもそうするの？嫌だなあ」

「ぐあ!？」

「鬼道ー!？」

大ダメージを受けた鬼道に声をかけても反応せず、それを音無は一瞥した後に雷門の所に駆けていった。

夕香の前でこうなるのは我慢だ、ありがとう鬼道。

「あ、獭良さんいた!」

俺が年末セールをやっているレトロゲー専門店で物色していたら、何かと絡んでくるガキが声をかけてきた。

「何でこんなところに来てんだ、夕香」

「そりゃあ獭良さんを探しにきたんだよ?」

いや可愛らしく首傾げてんだ、おかしいからな?

ここは店主も自負している程の隠れた名店、特定のルートで来なければ到達出来ねえ筈だ。

「どうやってここに?」

「獭良さんの気配がするなーって思ったからここに来たよ?」

は

…?の間にか俺にGPSでもつけたか?

いや、そうなれば嫌でも気付く筈。

マジのマジにオカルト地味な事やってのけたって訳か?

「獭良さんは何してたの?」

「見てわかんדר？レトロゲーム…つまり昔のゲームを買いに来たんだよ」

「ふーん、なんで新しいゲームじゃなくて昔のゲームなの？」

「オレ様も新しいゲームは揃えるが、昔のゲームにも良さは沢山あるって事だ。まアガキにはわから「あつ！そんな事より大事な話があるの！」

「……………なんだよ」

「今度雷門の皆とクリスマスプレゼント交換パーティをやるの、勿論来てくれるよね？」

「ビリー！」

「ひ、酷い…」

破れた招待状は風に舞い、夕香は涙を流した。

それをすつと指で拭い払うと、また笑顔を取り戻したその時。

「お前を殺す」

デデン！

テレレレテレレレ

テレレレテレレレ

デデッデン！「例のBGM」

「何なの…この人…」

「…?!謎の電波受信した気がする…」

いや心当たりはあるんだがそれはそれとしてだ。

「断る、別にオレ様はアイツらの味方でもねエからな」

「えー！ダメなの？」

「ああ、ダメだね」

「じゃあその代わりに…」

「あん？」

「私とデートしよー！」

なんでそうなる、最近のガキは皆こうなのか…？

大体オレ様はロリコンじゃあない、至ってノーマルだ。

おい店主のババア、こっち見てニヤニヤするな。その両手右手を左手にするぞ。

「ませてんじやねえよ、帰りな」

「やー!」

「やじやねえよ」

「お兄ちゃんに襲われたっていつちやうよ?」

「どこで覚えやがったそのセリフ!」

どうしてこうも厄介なガキになりやがった。

今はまだ仲に亀裂を入れる時じやねえつてのによ。

「目的の為なら手段を選ぶな、但し自分の矜持は捨てるな…でしよ?」

「けっ、物覚えのいいガキは嫌いじやねえが…」

「でしよ?じやあ早速クリスマス前だけどクリスマスデート!」

「はあ…」

その後オレ様は夕香に連れ回され、疲れて寝落ちした夕香を豪炎寺宅に送り届けた。

…豪炎寺の背後に魔神が出てたのは気のせいだと思いたい。